

化学研究科

学生数の確保 (人)	年次	定員	志願者		受験者		合格者	入学者	
			学内	学外	学内	学外		学内	学外
1年次	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	※ (—)	—	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)
3年次 編入学	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	※ (—)	—	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)	※ (—)
学位授与数 (人)	博士課程修了				論文博士		博士課程修士		
	修了年次定員		修了者数		授与数		授与数		
	13 (13)		7 (7)		— (—)		— (—)		
学生の研究活動 (件)	論文・著書発表数			学会発表数			受賞・表彰等		
	10 (28)			22 (42)			2 (3)		
学生の進路 (人)		教員	企業	公務員	研究員 (学術振興会)	その他			
	修了者	1 (1)	3 (—)	— (—)	3 (4)	— (2)			
	退学者	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)			

・「学位授与数」の欄の「博士課程修士」は、中間評価の合格者数を示す。

・() は前年度の数値を、※は外国人留学生を内数で示す。

1 化学研究科の活動

本年度は化学研究科の最終年度であり、28年間の歴史を閉じる年度となった。1-4年次生が数理物質科学研究科の所属となり、博士の学位取得を目指す5年次生の院生が本年度の主体となった。そこで以下のような活動を行った。(1)適切な博士論文作成のための授業カリキュラムを設定し、多様性を有する院生の育成を目指した。(2)21世紀COEプログラムとの連携により、ヤングパワー学際融合研究発表会を行い、他分野の学生との交流の機会と学問的刺激を与え、研究意欲の向上を図った。(3)博士論文の公開発表会と学位審査を行い、研究者や高度専門職業人に相応しい院生の養成を目指した。また、博士論文の公開発表会で研究内容、研究レベル、質議応答などの審査を行い、大学院生優秀論文表彰候補者を選定した。本制度を活用することによって大学院生の学術研究を活性化し、若手研究者の育成を大いに図ることができた。(4)院生に対する国内外での学会発表や論文誌への投稿を奨励し、意欲ある優れた院生の育成を目指した。(5)化学物質の排出・移動量の届け義務(PRT法)を遵守させるために化学物質の保管、管理状況を徹底させる教育活動も行った。

2 教員の教育業績評価の状況

教育業績の評価については、以下の内容について重点的に行った。(1)授業カリキュラムに記載された内容が担当教官により適切に行われたか。(2)博士論文作成の指導などが研究導教官により適切に行われ、博士の学位を取得させられたか。(3)学会発表や投稿論文など、院生の研究活動に対する研究指導が適切に行われたか。この他、研究科の運営、入試、連携大学院の副指導教官なども教育業績の評価の対象として含めた。以上の評価は、特別昇給の推薦、研究科で受領した研究費の配分などに反映するように配慮した。

3 自己評価と課題

年度当初に計画した教育・研究目標をほぼ達成することができた。特に本年は、5年次の化学研究科院生と1-4年次の数理物質科学研究科院生が並列して在籍する過渡期でもあり、複雑な教育体制を強いられたが、研究科として教育・研究指導方法の改善及び研究の活性化を行い、順調な成果が得られた。また、TA経費は減額されたが、21世紀COE「未来型機能を創出する学際物質科学の推進」プログラムによって、大学院生への効果的なRA経費の投入による研究・教育支援を行った。本プログラムを通じて理学・工学、研究分野間、研究室間の連携を強化し、大学院生に対する国内外での研究発表を効果的に促進することができた。尚、年度内で博士の学位を取得できない学生に対して数理物質科学研究科化学専攻への転研究科、転専攻を行い、学生の不利益にならないように配慮した。これまで長年、化学研究科院生に対する教育や研究指導を行い、多大な成果をあげて化学研究科の28年間の歴史に幕を閉じることができた。

4 その他特記事項

化学研究科の院生が、筑波大学博士課程学生に対する学長表彰および大学院生優秀論文表彰を受賞した。